

および使用目的を調べるとともに使用者に対して使用感などの項目について質問紙調査を行った。

【結果】歯内療法学分野において1年間に顕微鏡を使用した総患者数は105名で、使用回数は314回であった。前歯部に比較して大白歯部に多く使用され、部位では下顎左側第一大臼歯(21.2%)が、診断名では、慢性根尖性歯周炎90例(77.0%)が最も多かった。使用目的では穿孔部確認・処置や根管充填材除去、破折器具除去で高率を示すなど、使用頻度は過去の報告に比べ高く、多種多様の症例に使用されていた。使用経験年数では1～3年未満、10年以上の者が、28.6%と高率を示した。質問紙の「顕微鏡を用いた治療と学生教育との関わりをどう思われますか?」の問いには「今後、積極的に取り入れようと思う」71.4%と高率を示した。学生教育においても顕微鏡を用いた治療を今後積極的に取り入れたいという意見が多かった。

【考察】大白歯部は直視で見づらく、ミラーテクニックの使用においても限界があるため、前歯部に比較して顕微鏡使用の必要性が高くなったことが考えられた。過去の報告と比べて穿孔部確認・処置や根管充填材除去、破折器具除去に多く用いられ、「肉眼での対応が困難な治療が顕微鏡を使用することによって可能になる」、「今後は他の治療でも使用したい」との回答が多く、今後のさらなる使用が期待された。使用経験年数では1～3年未満、10年以上の者が高く、顕微鏡が使用しやすい環境であり若手の者がスキルアップしやすい環境だと考えられた。また、顕微鏡を使用した治療の利点の認知が広まったことも一因と考えられた。使用に際して難しいと感じた回答も多いことから、今後さらなるスキルアップが課題であり、患者の顕微鏡に対する理解が重要だと思われた。学生教育との関わりについて、「必要である」との回答が多く認められ、平成26年版の歯科医師国家試験出題基準においても「顕微鏡を用いた歯内療法」が明記されている。また、近年の歯科医師国家試験においてもいくつか出題されており、今後とも学生教育に取り組んでいくべき内容であることが示唆された。

【結論】顕微鏡を使用した治療の利点が認知さ

れ使用頻度が高まるなか、最近では予約が取りにくい状況となっている。先端医療を提供しかつ研究教育機関である大学附属病院として、さらなる設備面での充実が必要である。

9) 本学附属病院における歯科医師臨床研修10年間の推移

一平成18年度から平成27年度について一

○保田 稔¹、佐々木重夫¹、清野 晃孝¹
鈴木 史彦¹、渡邊 崇¹、成田 知史¹
佐藤 健太¹、佐藤麻里恵¹、北條健太郎¹
與座 崇史¹、山家 尚仁¹、小松 泰典¹
瀬川 洋¹、杉田 俊博¹、山森 徹雄²
(奥羽大・附属病院・地域医療支援歯科、
奥羽大・歯・歯科補綴²)

【緒言】歯科医師免許取得後に指導歯科医や上級歯科医指導の下に臨床経験を積む卒業教育である、歯科医師臨床研修制度が平成18年に必修化されてから10年が経過した。今回は本学の臨床研修状況を把握する目的で、10年間における各年度の臨床研修歯科医人数と選択されたプログラムおよび研修終了後の本学への在籍状況、研修医が担当した患者の症例報告会抄録集より症例概要および指導歯科医・協力歯科医について調査した。

【方法】1. 各年度の人数と各プログラム(Aプログラム:臨床研修の全ての期間を本学で履修する単独型研修, Bプログラム:4か月を協力型研修施設で履修する地域医療短期研修, Cプログラム:8か月を協力型研修施設で履修する地域医療長期研修)および研修終了後に本学に在籍した者の推移を検討した。2. 症例概要と研修医が施術した高頻度歯科治療の推移を検討した。3. 研修医に関わった指導歯科医・協力歯科医の専門分野について検討した。

本調査に関しては奥羽大学倫理委員会(第152号)の承認を得た。

【結果】1. 平成18年から27年までに本学の臨床研修を修了した者は412名(男性335名, 女性77名), 本学出身者は395名(95.9%)であった。

2. 平成23年度および24年度では他の年度と比べて、BおよびCプログラムを選択したものが多く認められた。また、修了後の本学在籍者率では

23年度および24年度が30%未満であった。

3. 歯科補綴系、口腔外科系と比較して66.8%が歯科保存系治療を症例報告に用いていた。歯科保存系の治療内容を分野別でみると、歯内系治療が若干少ないものの、ほぼ均等であった。

4. 指導歯科医・協力歯科医は半数近くが保存系分野であった。

【考察】1. 多くの年度において当院での研修期間が長いAプログラムが多く選択される傾向にあったが、平成24年度ではBおよびCプログラムの院外での研修を選択する研修医が多く認められ、平成23年度および平成24年度では研修修了後に本学に在籍した者も少ない傾向にあった。これらは東日本大震災後の影響が関与しているものと考えられた。

2. 症例報告からコンポジットレジン充填、スケーリング、感染根管治療などの歯科保存系の治療が研修医の高頻度治療であることが推察され、それにとまって指導に関わった歯科医師も歯科保存系の者が多い傾向にあったと考えられた。

【結論】1. 奥羽大学歯学部附属病院において10年間で412名の臨床研修歯科医師が研修プログラムを修了した。

2. Aプログラムの選択が多い傾向にあったが、平成24年度ではB、Cプログラムが多く選択された。

3. 症例報告では歯科保存系治療が多く、指導した歯科医師も歯科保存系分野の者が多い傾向にあった。

10) 自傷行為防止のためにマウスガードを応用したLesch-Nyhan症候群の一例

○関野 貴大, 高橋 俊智, 三科祐美子
安積 優衣, 畠山有紀子, 赤城 千佳
永山 道代, 加川千鶴世, 島村 和宏
(奥羽大・歯・成長発育歯)

【緒言】Lesch-Nyhan症候群は核酸代謝酵素の遺伝子変性による伴性劣性遺伝である。全身所見として不随意運動、精神発達遅滞、高尿酸血症がみられ、歯科的所見では口腔粘膜の咬傷が多い。今回、Lesch-Nyhan症候群患児に対し歯科的管理を行う機会を得たのでその概要を報告する。尚、

今回の発表に際し、保護者の同意を得ている。

【症例】初診時年齢1歳9カ月の男児。下口唇裂傷の精査、加療を主訴に当科を紹介、受診した。

既往歴：クレチン病、肛門周囲膿瘍、高尿酸血症、精神運動発達遅滞

家族歴：特記事項なし

現病歴：生後11カ月頃より下口唇赤唇部に口傷による実質欠損と潰瘍が認められ、近医を受診した。下唇を外反しテープ固定で経過を診ていたが、下口唇辺縁の欠損が著しいため、他の対応策を希望し当科初診となった。初診時には、上下顎両側第1乳臼歯まで萌出しており、上顎右側乳中切歯と乳側切歯は癒合歯と思われた。上唇小帯の高位付着と下口唇一部欠損および潰瘍も認められた。

【治療経過】初診後体調不良のため未来院となり、2歳4か月時から、下口唇の咬傷悪化を防ぐため上顎にマウスガードを装着した。マウスガード作成にあたっては、できるだけ咬合に変化を与えないように心掛けた。5歳頃から拒否行動が強くなり、印象採得に苦慮するようになったため、口腔内の精査と初期治療、ならびに印象採得を目的に全身麻酔下での処置を選択し、修復処置と印象採得を行い、マウスガードを作製装着した。

【まとめ】2歳4か月時から、マウスガードを装着することにより、歯の咬耗や破折を防ぎ、咬傷による軟組織へのダメージを軽減することができた。今後、永久歯への交換に伴い口腔内の違和感から、咬傷が頻発する可能性もあるため、定期的な観察を続けながら、予防に努めていきたいと考えている。

11) Fusuma sliding flap法を用いた下唇癌切除後の下唇再建の1例

○松葉 雅俊¹, 河西 敬子¹, 矢代 晋一¹
秋本 哲男¹, 小坂橋 勉¹, 三科 正見¹
金 秀樹²

(寿泉堂総合病院・歯科口腔外科,
奥羽大・歯・口腔外科²)

【緒言】下唇癌の手術では下唇の全幅・全層が失われ、顔貌の整容性と口腔機能が著しく損なわれることが多い。今回われわれは、下唇癌切除術